

高麗朝に於ける儒學の發達と睿宗

池 内 宏

朝鮮の高麗朝に於ける文運の發達は、第十一代文宗王の時に至つて一時期を劃し、それは更に將來の隆運を約束するやうに見えたが、實際此の王から順宗・宣宗・獻宗・肅宗・睿宗を経て仁宗に至るまで七王約一百年の間は、高麗の文藝學術が最も盛況を呈した時代である。

順宗（第十二代）は文宗の長子、其の在位は僅かに數箇月に過ぎなかつた。第二子は宣宗（第十三代）、第三子は肅宗（第十五代）であつて、有名なる學僧大覺國師義天の同母兄であるが、共に好學の君主であつた。即ち宣宗は「博覽經史、尤工製述」といはれ、肅宗は「五經・子・史、無不該覽」といはれてゐる。宣宗の元子を以て肅宗の前に位に即いた獻宗（十四代）も、九歳にして書畫を好くしたといふが、十一歳で嗣立した幼主であつたのみならず、其の治世は僅かに一年半ばかりであつた。

あまねく群書を該覽したといはれる肅宗は、書籍を愛好すること尋常ではなく、元年、文德殿に於いて歷代祕藏の文籍を披覽し、部帙の完全なるものを選んで、文德・長齡二殿及び御書房・祕書閣等

(1)

(2)

に分藏せしめ、其餘は兩府(中書門下省及び樞密院)の宰相以下の文臣に賜はつた。六年には、九經・子・史各一本を御史臺・尙書省・樞密院に分置せしめた外、國子監(國學)に書籍鋪を置き、祕書省の文籍の板本の委積して毀損したのをこゝに移藏して、廣く摹印せしめた。王はまた新たに書殿を設けて延英殿といひ、當時海東第一の古文家として名高かつた金黃元を召して書籍を掌らしめ、自ら書を觀て疑はしいところがあれば、其の都度之を黃元に質した。さうして黃元に對しては其の名を呼ばないで先輩といつたといふことである(高麗史金黃元傳)。四年には延英殿に御し、六年には重光殿に御して親ら御藏の書籍の檢閲を行つたが、辛巳の歲なる六年度の檢閲の際に「高麗國十四葉辛巳歲藏書、大宋建中靖國元年、大遼乾統元年」と刻した藏書印の捺されたことは、たゞ／＼我が國に遺存する圖書寮所藏の北宋版通典及び前田侯爵家所藏の重廣曾史等に依つて明かにせられる。宋に使した王叡・吳延寵等が大平御覽一千卷を齎らし還つたのも此の年(六年)であつて、其の將來の事情については、高麗史の吳延寵の傳に「肅宗五年、與尙書王叡如宋賀登極、以朝旨購大平御覽、宋人祕不許、延寵上表、懇請乃得、及還、王曰、此書文考(宗文)嘗求之不得、今朕得之、使者之能也、使・副・僚佐、竝加爵賞、拜延寵中書舍人」と見えてゐる。肅宗の悦び知るべきである。

肅宗の子は睿宗(第十六代)、睿宗の子は仁宗(第十七代)であるが、これ等の二王は宣宗・肅宗にもまごつて一層儒學を雅好した。高麗の史臣が睿宗に贊して「開設學校、教養生員、置清講・寶文兩閣、日與文臣講論六經、偃武修文、欲以禮樂成俗」といひ、金富軾が仁宗に贊して「仁宗自少多才藝、曉音律、善書畫、喜觀書、手不釋卷、或達朝不寐、及即位、聞明經申淑貧甚、召入內侍、受春秋經傳」といつたのを見ても、其の大概を知ることができる。

かくの如く宣宗・肅宗・睿宗・仁宗等、文宗の子孫の相ついで王位に登つたものが、文宗及び以前の諸王にまさつて儒學を好み、一方大覺國師義天の如き儒佛二道に博通する傑出した人物の現はれたのは、文宗朝に至つて發達の一時期を劃した高麗の文運が、其の後も更に時代の降るに従つて、益々盛況を呈したことを語るものである。故に高麗末の大儒李齊賢も、睿・仁二宗と其の時代の文風を讚揚して次の如く述べてゐる(益齋集所收樂翁稗說後集一)。

靖國安和寺(睿宗十三年王の重修した寺院)有石刻睿王唐律四韻詩一篇、其後云太子某(構)書者、仁王諱也。是時王(睿宗)與太子(仁)皆礪精向學、延訪儒雅、而尹璿・吳延寵・李頰・李預・朴浩・金緣(後名仁存)・金富(富軾の弟)・富軾(富軾の弟)・富儀(初名富軾)・洪灌・印份・權適・尹彥頤(尹璿の子)・李之氏・崔惟清・鄭知常・郭東珣・林完(宋人)・胡宗旦(宋人)、名臣賢士布列朝著、討論潤色、臺々有中華之風、後世莫及焉。

こゝに列擧せられてゐる尹璿・吳延寵以下十九人の人物は、いづれも第十一代文宗から第十七代仁宗に至るまで七王約一百年の間に、各、文藝學術を以て名を爲した文臣である。さうして此の間は宋との關係が親密であつたから、これ等の文臣の中には使を宋に奉じたものが少なくなかつた。事蹟の全

くわからぬのは印傍で、他のものは多く高麗史に傳がある。たゞし朴浩・權適・鄭知常・郭東珣の四人には傳を闕くが、權適の傳は京城府長湍出土の墓誌(朝鮮金石總覽、上)に依つて補はれるし、他の三人は高麗史の世家・列傳及び崔滋の補閑集等に散見する記事に依つて其の閏歴の若干を窺ふことができる。なほ當然相立べて擧げらるべき著名なる儒臣には、金黃元・李軌・朴景仁・韓嘏如(後名安仁)・李永・鄭克永・鄭沆・鄭襲明等の如きもあつた。いづれも高麗史列傳中の人物である。

二

睿宗に關しては、王自身が好學の君主であつたといふ外、文教史上に於ける王の事業として特に記すべきものがある。上に引いた高麗の史臣の贊に「開設學校、教養生員」とあるのがそれで、具體的にいへば、國學を擴張し、竝に養賢庫といふ特殊の設備を創めたのである。以下これ等の事實について説明しよう。

高麗朝の初期に於ける文運の發達に伴ひ、文宗朝の前後には、成宗の時から存在した國學(國子監)の外に、有名なる崔冲の九齋を初めとして所謂十二徒の稱ある多數の私學が蔚然として起つた。しかもこれは一面官學たる國學の不振を意味するものと思はれるが、また其の結果として國學は益々衰運に傾いたやうである。宣宗六年八月、國學を修葺するが爲めに、文宣王の像を順天館(中國の使人を待つ館)に移したことがある。さうして其の修理が竣つたからであらうが、八年九月、國學の壁上に七十二賢の

像を畫き、其の位次は宋の國子監のそれに従ひ、其の章服は皆十哲に倣ふやうにした(高麗史、禮志)。又四十餘年の後なる肅宗の六年には、國子監の奏するところに従ひ、文宣王廟の左右の廊廡に、新たに六十一子、二十一賢の像を畫き、釋奠を行ふ時從祀することとした。かくの如くにして宣宗・肅宗二代の間に、從來の國學は其の外觀を新たにしたのである。然らばそれは學堂としての實質的の隆興を意味するかと云ふに、さうではなかつたやうである。肅宗七年、即ち國學の文廟が六十一子・二十一賢の新畫像で飾られた翌年、宰相邵台輔等は國學の廢止を奏請した。其の理由とするところは、「國學にて士(學生)を養へば、糜費費られず、實に民の弊を爲す。且つ中朝の法は、直ちに我が國に行ひがたし」といふのであつた。さすがに好學の王なる肅宗は之を許るさなかつたけれども、宰相の間からかゝる議の唱へられたのは、元來國學が其の機能を發揮してゐなかつたからであらう。さうして更に臆測すれば、邵台輔等の此の奏請の裏面には、所謂立徒の儒臣として私學を經營主宰してゐるもの、利己的な者が潜在してゐたのではあるまいかと思はれる。

さて次の睿宗が位に即き、深く學問を好んだ王は、二年正月、制を下して「置學養賢、三代以降致治之本也、而有司議論、有所未定、宜令疾速施行」といつた(高麗史、睿宗世家)。高麗史節要には同じ制を擧げ、次に「王方嚮文學、遂下此制、大臣無一人奉承、時議惜之」と附記してある。高麗史の選舉志、學校の章に「睿宗二年、制曰、置學養賢、三代以降致治之本也、而有司議論未定、宜疾施行。睿宗方

儒文學、遂下此制、士類莫不欣。然大臣一人無奉承、時議惜之」とあるのは、上の二條と同じ材料に本づいた記事である。かくの如く學を置いて賢を養はうとする新王睿宗の企圖に對し、「有司の議論未だ定まらざるところあり」といひ、又た士林の之を欣んだにも拘らず、大臣等に一人の奉承するものもなかつたといふのは、當時當路者の間に官學を振興させようとする熱意のなかつたことを語るもので、それは數年前に於ける肅宗七年の邵台輔等の奏請と直接の聯絡ある事實でなければならぬ。

然るに睿宗は、四年七月、國學試を行ひ、大學(國學の四學の一)の學生七十人、武學の學生八人といふ多數の學生を試取し、儒學は麗澤以下の七齋に分處せしめ、武學は講藝齋に置いた、即ち李齊賢の益齋集(卷九、上、忠宣王世家)に、

睿王四年秋七月、始爲國學試、試取大學崔敏庸等七十人・武學韓子純等八人、分處七齋、周易曰麗澤齋、尙書曰待聘、毛詩曰經德、周禮曰求仁、戴禮曰服膺、春秋曰養正、武學曰講藝。

とある。同じ記事は高麗史節要にも見え、たゞ「始爲國學試」の一句を缺いてゐる。此の時國學試の行はれたのは事實にちがひないが、國學試(國子監試)其のものは、高麗史選舉志に明文の存する如く徳宗の朝に始まり、文宗の時鄭倍傑(立徒の儒臣十二人の一)の子文が年十五・六にして國子監試に赴いたといふ證もあるから(高麗史(鄭文忠)、此の點は節要に従ふべきである。高麗史の選舉志には「四年七月、國學置七齋」といひ、次に益齋集と同様儒學の七齋及び武學に於いては講藝齋の名を擧げ、次に

「試取大學崔敏庸等七十人、武學韓自(子)純等八人、分處之」と敍べてある。しかしこれは必ず事實の本末を顛倒した記事であつて、儒學の學生七十人の分處せられた國學の七齋は、前からあつたものでなければならぬ。

數年を経て九年に至り、此の年二月、國子學の學生張仔等六十人、闕に詣りて上書し、國學を立つることを請うたといふ(高麗史節要及び高麗史選舉志)。國學を立つることを奏請したといふのは、一見不可解であるけれども、これは次に述べるところに依つてわかる如く、國學の創立ではなく、其の擴張を意味するのである。ところで上記の如く衆議を排して國學を重んじた睿宗は、此の年八月、自ら國學に幸して釋奠を行つた。これは空前の盛儀であつたらしく、高麗史の禮志及び高麗史節要に「王詣國學、酌獻于先聖・先師、御講堂、命翰林學士朴昇中借大司成、講說命三篇、百官及生員七百餘人立庭聽講、各進歌頌、御製詩一首宣示左右、令各和進」と記るされてゐる。かくて十一年四月には、文武兩學を立てんとして、西京(平壤)行幸の間に其の意を公表した。制に曰く、「文武兩學、國家教化之根源、早降指揮、欲令立其兩學、養育諸生、以備將來將相之學、而有司各執異論、未有定議、宜速奏定施行」と(高麗史世家及び選舉志)。さうして十四年七月に至り、遂に國學の學舍を廣設し、名儒の中から學官・博士を選んで經義を講論せしめた。即ち高麗史節要に、

秋七月、詔廣設學舍、教養諸生、置儒學六十人・武學十七人、以近臣管勾事務、揀擇名儒爲學官。

博士、講論經義。國初(成宗の時)肇立文宣王廟于國子監、建官置師、至宣宗欲教育、而未遑、王(睿宗)銳意經術、文教稍振。

と記るされてゐる。たゞし學舎を廣設したといふのは、單なる擴張ではなく、同時に其の移轉を意味するのであつて、それは四年の後なる仁宗の元年、宋の國信使路允迪に隨つて高麗に來た徐兢が、其の際の見聞録として後世に遺した有名な高麗圖經の中に、彼れの目撃した高麗の國子監について次の如く敘べてゐるので明かである(高麗圖經、卷一六、官府)。

國子監、舊在南會賓門内、前有大門、榜曰國子監、中建宣聖殿、兩廡闡齋舍、以處諸生、舊制極隘、今移在禮賢坊、以學徒滋多、所以修其制耳。

即ちもと南方の會賓門(開京の外城の南門)の内にあつたといふ「極隘」なる國學は、宣宗の時修葺せられた舊國學にちがひなく、——上に引いた高麗史節要の文に「國初……至宣宗欲教育」とあるのは、王の六年に於ける此の修葺を意味する——學徒の數の多きが爲めに禮賓坊に移されたといふ國學こそは、睿宗の廣設した新校舎でなければならぬのである。去る九年二月、國子學の學生六十人が闕に詣りて上書し、國學を立てることを請うたといふ事實の意義も、これに依つて明かであらう。即ち彼等は王の意を迎へて、國學擴張の促進運動をしたのである。又た特に注意すべきは、同時の處置として國學に養賢庫の設けられたことである。其の事は前掲の高麗史節要の文に見えないが、高麗史

選舉志に「十四年七月、國學始立養賢庫、以養士」といひ、次に節要と同じ事實を述べてある。此の養賢庫は高麗の太祖が西京に置いた「學實」と同じく、學校を維持する爲めの基本財産であつて、其の設備の下に、肅宗の時宰相邵台輔等が「國學にて士を養へば、靡費賈られず、實に民の弊を爲す」といつたやうな憂も去り、國學の存立は鞏固にせられたのである。

かくの如く睿宗は前王肅宗の時から、やゝもすれば廢止せられんとしつゝあつた國學を重んじ、隱忍して自説を棄てざること十有四年、遂に之を振起せしめた。故に次王仁宗の七年、仁宗の幸學の事を記した金守雌は、其の記文の中に睿宗の興學を讚仰して、「惟ふに我が睿廟、剛明自ら斷じて衆論を破排し、聖舎を草創して才を育し道を重んず。四方の多士靡然として化に向へり」といつてゐる(東選、卷六四、幸學記)。

三

睿宗は國學を振興せしむると共に、また宮中に學館を創めて、之を經筵の處とした。これも王の事業として特筆すべきものである。高麗の儒學は國初以來主として詩賦と文章とを重んじ、明經の方面は常に輕んせられてゐたが、王はかゝる學風を改めようとする趣旨を以て、清謙・寶文二閣を宮中に設け、頻りに文臣を召して六經を講論せしめたのである。王も時流の然らしむるところとして、もと章句を尙び、即位の初めより四時をり／＼の興にまかせて詩を賦し、之を左右の文臣に示して和進せ

(10)

しめることを常とした。前王に事へた郭尙の一子に興あり、博學能文にして隱士の風があつたが、王は興を寵遇すること比なく、禁中の純福殿に居いて常に左右に侍せしめ、相與に談論唱和し、後ちまた居室を城東の若頭山に賜はるに及んでは、其の山齋に微行して詩文を弄んだ(高麗史 郭興傳)。十一年四月、王は西京に幸し、既記の如く其の間に文武兩學を立つるの制を下した。此の行幸の際にも大同江の船上に置酒し、侍臣と共に唱和して楽しんだが、たまく、崔淪は上書して王を諫めた。淪は文宗朝の大儒崔冲の玄孫、此の時知制誥を以て駕に扈してゐたのである。上書して曰く、「昔し唐の文宗、詩學士を置かんと欲す。時に宰相奏して曰く、詩人は多く輕薄なり、若し文臣として顧問を承けしむれば、恐らくは聖聰を撓ぐるることあらんと。文宗乃ち止めたり。帝王は常に經術を好み、日に儒雅と共に經史を討論して政理を咨諏すべし。安んぞ童子の雕篆を事とし、數々輕薄なる詞臣と與に風に吟じ月に嘯き、以て天衷の淳正を喪ふことあるべけんや」と(高麗史 崔淪傳)。聰明なる王は此の上書に依つて自ら悟るところあり、此の年秋八月、洪灌を清讜閣の學士、鄭克恭を直學士、尹諧を直閣に任命した。又冬十一月に至り、更に金富俗を寶文閣の待制としたが、八月の任命は清讜閣の開設、十一月の任命は寶文閣の設置を意味するのである。

清讜閣は經筵の爲めに設けられたもので、藏書閣を具へた禁中の學館である。睿宗の此の閣を開くや、學官として學士・直學士・直閣各、一員を選置し、朝夕經書を講論せしめた。又同時に司書官

(11)

として校勘四人を置き、其の中二人は御書院の校勘を以て之に充て、他の二人は職事を以て之を兼ねしめた。即ち十一年八月の事である。然るに清讜閣は禁内にあり、隨つて學士の宿直する場合に、其の出入が自由でない不便があるので、數月の後なる十一月に至り、其の傍に別閣を設けて寶文といひ、之を以て學士會講の處とした。さうしてさきに置いた學士・直學士・直閣等の官には寶文閣の名を改め冠すると同時に、直學士の次に別に待制の官を加置した(高麗史節要、高麗史選舉志)。かくて二閣の置かれた後ち、王は頻りに清讜閣に出御し、寶文閣の官員並に他の碩學を召して詩・書・易・禮記・中庸・孝子等を講論せしめたが、王の一代の間に寶文閣の官員に充てられたものは、洪灌・鄭克恭・尹諧・金富俗・韓敏如(後名安仁)・朴昇中・李永等であつて、いづれも皆な一時の豪彦であつたのである。王が金緣(後名仁存)に命じて製せしめた清讜閣記には、二閣について次の如く述べてある(東文選、卷六四、高麗史金仁存傳、高麗史節要、卷六)。

王以聰明淵懿・篤實輝光之德、崇尚儒術、樂慕華風、故於大内之側・延英書殿(睿宗の設けたる藏書閣)之北・慈和(名殿)之南、別創寶文・清讜二閣、一(寶文)以奉聖宋皇帝御製詔勅・書畫、揭爲訓則、必拜稽肅容、然後仰觀之、一(清讜)以集周(公)・孔(子)・軻(子)・孟(子)・雄(揚)以來古今文書、日與老師宿儒、討論敷暢先王之道、藏焉・修焉・息焉・遊焉、不出一堂之上、而三綱五常之教、性命道德之理、充溢乎四履之間。

上述の如くにして寶文閣を設けた睿宗は、其の翌月(十二月)宴を清謙閣に張つたが、席上學士等に告げて曰く、「朕嘗て貞觀政要を覽たるに、唐の太宗いへらく、「但だ天下をして太平に、家々給し人足らしむれば、祥瑞なしといへども、徳は堯舜に比すべし。若し百姓足らず、夷狄内侵せば、縦ひ芝草・鳳凰あるも、何ぞ桀紂に異ならんや」と。斯の言至れり。庶幾くは景行せん」と。かういつて、貞觀政要を註解して上進することを金縁・朴景仁及び寶文閣の學士に命じた。此の一事を見ても、王の二閣を創めた趣旨は明かであらう。

四

上述の如く睿宗が銳意國學を振興せしめたので、次王仁宗の初めに至り、國學の學式が詳定せられた。又た王の五年には國內の諸州に學校を設立せよといふ詔も下された。蓋し高麗に於ける郷校設置の嚆矢であらう。たゞそれが如何なる程度に實現せられたかは詳かでない。十二年には、孝經・論語を闡卷の童稚に分賜したが、これも教道を廣めようとしたものである。一方王自身の好學は、また父王睿宗に劣らぬものがあり、壽昌宮の側に書籍所を置き、宋人林完及び金富轍等の諸儒臣を更直せしめて顧問に備へたりした(高麗史 林完傳)。さうして二十四年に互つた在位の間、頻りに經筵を開き、當時の鴻儒金富佾・金富軾・金富儀(初名富轍)・鄭沆・鄭知常・尹彦頤・鄭襲明等をして六經の諸篇を講論せしめ、時には宋朝忠義集・唐鑑・司馬光の遺表及び訓儉文等をも讀ましめた。さうして司馬光の遺文

に對しては、それに現はれてゐる光の忠義に感じ、歎美之を久しうしたといふことである(高麗史 金富軾傳)。

仁宗の元年たゞく開京を訪づれた宋人徐兢は、彼れ自ら見聞した高麗の儒學について次の如く敘べてゐる(高麗圖經 卷四〇)。

比者使人(路允迪等)到彼(高麗)、詢知臨川閣(會慶殿の西の藏書閣)藏書至數萬卷、又有清燕閣、亦實以經・史・子・集四部之書。立國子監、而選擇儒官甚備、新敞靈舍(睿宗の國の學擴張)、頗遼太學(宋)月書・季考之制次第諸生。上而朝列官吏、閑威儀而足辭采、下而闔閭陋巷間、經館・書社三兩相望。其民之子弟未昏者、則群居而從師授經。既稍長則擇友、各以其類講習於寺觀、下逮卒伍・童穉、亦從鄉先生學、於庠盛乎。

仁宗の即位の當時、宋人をしてかくの如く感心せしめたほど盛況を示してゐた高麗の儒學は、好學にして善良なる王の二十四年の治世を通じて、益々盛んになつても、決して衰へはしなかつた。さうして其の隆昌の勢は、「大平好文の主」と呼ばれた次の毅宗の時に至つて極まつたのである。

(昭和十二年九月十六日)